

NCS

No. 50

自然・環境・人

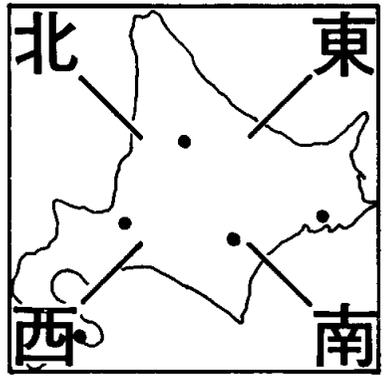
北海道自然保護協会会報
Nature Conservation Society of Hokkaido

1985年3月号



羅臼岳之残雪

フォトグラファー：綿引 幸造



奥平和と採石

木下 正太郎



私がこの地に移って来ましたのは昭和二十年一月でした。間もなく終戦となり新日本建設のための木材を確保するため近くの民有林、奥山の官林が切り出された跡地に植樹されましたが急には伸びません。大雨がふると発寒川は氾濫し橋がいくつも流され、馬車が通れなくて復旧

するまで何か月もかかるということが何度もくりかえされ昭和三十一年ごろには砂防ダムや築堤が作られ洪水はなくなりました。しかし私の目には、川岸へ木の枝がおおいかぶさり、木の根が川底にみえ、石と石との間のせせらぎがきこえる昔の風景が焼きついておりません。

遠く手稲、阿部山に朝日が照らす春夏のみどり、秋の紅葉、晩秋には白雪がいち早く現れる良い環境にめぐまれ、近くの山にはトドマツや雑木がしげり、きれいなコケのはえている岩もありました。それらを眺めると朝は今日一日中気持ちよく働こうと思ひ、夕べは一日のつかれがほぐれる思いをしておりますが昭和三十年ごろから山に採石場ができてしまいました。発破をかけると家はゆれ、人も地面に立っているとゆれ動いて恐怖におびえました。朝早くから岩石をたたくジャントの高い音は健康な者でも一日中ううつし、病人は心安まる時はありませんでした。住民と企業側は何度も話し合いましたが公害は小さくなりませんでした。そのころ採石場の近くに公園墓地が完成しましたので、企業側はプラントを山奥に移し、山の陰で採石する口約束をしました。ところが昭和五十九年春になると、この約束を破って市街地から直接みえる山で今後十数年間、山を削りたる計画案を行政庁に提出しました。

計画案をみると公害防止対策は不十分です。ふたたび採石が実施されると住民は景観の破壊のほか、騒音、振動、粉じん、河川の汚濁に悩まされますので昨年くれ、絶対反対を表明しました。日曜祭日になると一般市民の方々も手

稲山遊歩道に沢山こられます。自然の中に入るところに、自然破壊のみにくいところを見せるのは住民の一人として残念でございます。

(農業者・札幌市在住)

エキノコックス

渦中のキツネ

三澤 英一



北海道では従来、エキノコックス症は道東の根釧地方にだけ見られる風土病と考えられてきたが、最近相次ぎ各地で発見され、全道的規模で汚染されていることがわかってきた。

こうした汚染の拡大で、エキノコックスの媒介動物としてのキツネの存在がクローズアップされ、とりのぞきにより解決しているという動きが出ている。

道は、キツネはエキノコックス保虫率が最も高いため、汚染地でのとりのぞきは汚染を薄める効果があるとして駆除対策を進めている。しかし、駆除は汚染地でのキツネの密度を一時的に下げた効果はあっても、周辺地から汚染地へのキツネの移動を招く結果につながり、いたち

ごっこに終る可能性が高い。ではいっそのこと、かつての礼文島の様に全道レベルでの駆除はどうかという論理も出てこようが、これは離島という特殊な条件下で成功したこと、現実性の全くない空論である。

本来エキノコックス対策は、エキノコックス症を防ぐことが目的のほうである。それがエキノコックスの媒介動物であるキツネをいかに減らすか、の対策が主体となっていたのではなからうか。

今、何よりも望まれるのは科学的対策である。というのも、汚染拡大の原因については、元来エキノコックスが北海道全域に分布していたとする土着説、牧草に虫卵が付着して運ばれたとする牧草移動説、エキノコックスそのものが大発生したとする流行説など諸説ふんぷんとしているが、科学的には何ら説明されていないからである。それらの疑問に答えぬまま、保虫率が高いという理由だけでキツネを駆除することは、エキノコックス問題の根本的解決にはならないだろう。

道は媒介動物の感染状態や、エキノコックスそのものの生態を調査、研究するための感染実験室の新設を六十年度予算案に計上したという。ようやく科学的解明に一步踏み出したといえるが、こうした研究は成果が上がるまで五年、十年の期間を要する。まず、それまでの間は防衛策の徹底が先決である。つまり、虫卵を体内に取り込む機会を減らすことである。生水は飲まない、畜犬に触れた後は手を洗う、キツネや野犬を人里に近づける原因となる農水産廃棄物の投棄はしない等の防衛策で感染の確率は減るだろう。

道は昨年、汚染の拡大が明らかになった時点で、衛生教育の徹底、飲料水対策を示したが、裏を返せば騒音が大きくなるまで、行政も住民も無関心、無防備であつたということである。このエキノコックス問題から、我々は自然とのつき合い方を学びとる機会としたいものである。

(札幌新川高校教諭・札幌市在住)

大雪山の自然を壊す

白金林道

寺島 一男



◆急ピッチの林道工事

美瑛富士の麓からオプタテシケ山の中腹に向つて、一本の林道が出来た。旭川営林支局の手による「白金林道」である。幅員三・六尺、延長七・九尺の事業林道である。一昨年から昨年までの工事でおよそ七尺が出来上がり、今年度分残り〇・九尺も、すでに森林の伐採が終了している。

現地は、十勝連峰の中でも優れた天然林地帯であり、国立公園普通区域、水源涵養保安林指定地域である。近くに美瑛川源流の原生林があり、隣接して国設野



鳥の森などがある。

◆異常な幅の森林伐採

大きな問題点は、四つほど考えられる。第一は、森林の伐採幅が異常に広く、それが標高千尺の亜高山帯にまで及んでいることである。営林支局の説明では、平均で十六尺位のはずというが、私たちの測定では平均二十二尺はあつた。幅員が三・六尺、平均斜度も八度前後の緩い斜面で、直線部分の多い道路を付けるのに、どうしてこんなに広く切らなければならないのであろうか。

◆問題のある保安林解除

第二は、水源涵養保安林の解除が、平均幅にして十二尺しかなされていないことである。将来林地に戻るところは解除をしていないというが、その場所に、工事に伴って出てきた巨岩が山と積まれていたり、伐根が集められたりして、どうみても林地回復の見込みはない。ダケカンバの混入が著しい亜高山帯の環境にあることや、工事によって表土が削られている状況にあること等を考えてみると、この伐採跡に木が生えてくるか疑問である。

◆普通区域確保のかけ込み作業

第三は、現在、環境庁が国立公園の保護区域を拡大するため見直し作業をす

めているが、その目前のかけ込み作業ではなかつたかということである。見直し作業の中で、環境庁は、亜高山地帯のすぐれた森林地帯を格上げする意向でのぞんでいるが、現実に白金林道のような既成事実が生ずれば、否応無しに線引きの対象からはずさざるを得ないのである。美瑛富士スキー場開発計画も絡んでいて、水面下の事情は複雑なのである。

◆大雪縦貫道の先取り工事

第四は、この林道の完成によって、二年前計画中止となつた大雪縦貫道が、容易に復活してくるということである。すでに出来ている「上俣真布林道」「水築右沢林道」を含めると、これらの林道が忠実に縦貫道の予定ルートを開削しており、西側ルートのはほぼ八割を林道でつくり上げたことになる。白金林道終点のわずか一・五尺先が、縦貫道のトンネル予定地点である。心すべき問題である。

(旭川工業高校教諭・旭川市在住)



直徑 10 近い巨木が無残に伐たれている



ESSAY

第一志望

文・河邨 文一郎



NHKテレビの「二十一世紀は警告する」シリーズのなかで、「現代は難民の世代」というタイトルが出されたが、うまいことを言うものだと思った。南ベトナムのポルト・ビープル、タイ国内のカンボジア難民、バングラデシュの飢餓民……数え立てればきりが無い。これら難民の社会的リハビリテーション（復権）が現代の地球社会の最大の課題の一つであることには、誰も異論のないところだろう。

数日前、ある会合で、東京から来た外交官から、在日ベトナム難民の間に、日本に対する苦情が多い話を聞いた。居住環境から職業にわたるまで苦情だらけで極端な言い方をすれば、こんな国にいられるか、という調子なのだ。この話を聞いて、出席のお歴々からは、お役所根性でやるからだ、人間社会から除外しておいてなんでも金で解決しようとするからだ、日本人は国際性に欠けていて日本の流儀を生活面でも押しつけようとするからだ……というふうに、日本に対する非難が噴き出した。まるで自分たちだけは日本人ではないかのように――。

まあ、こんな光景は、日本ではごくありふれているのだが。

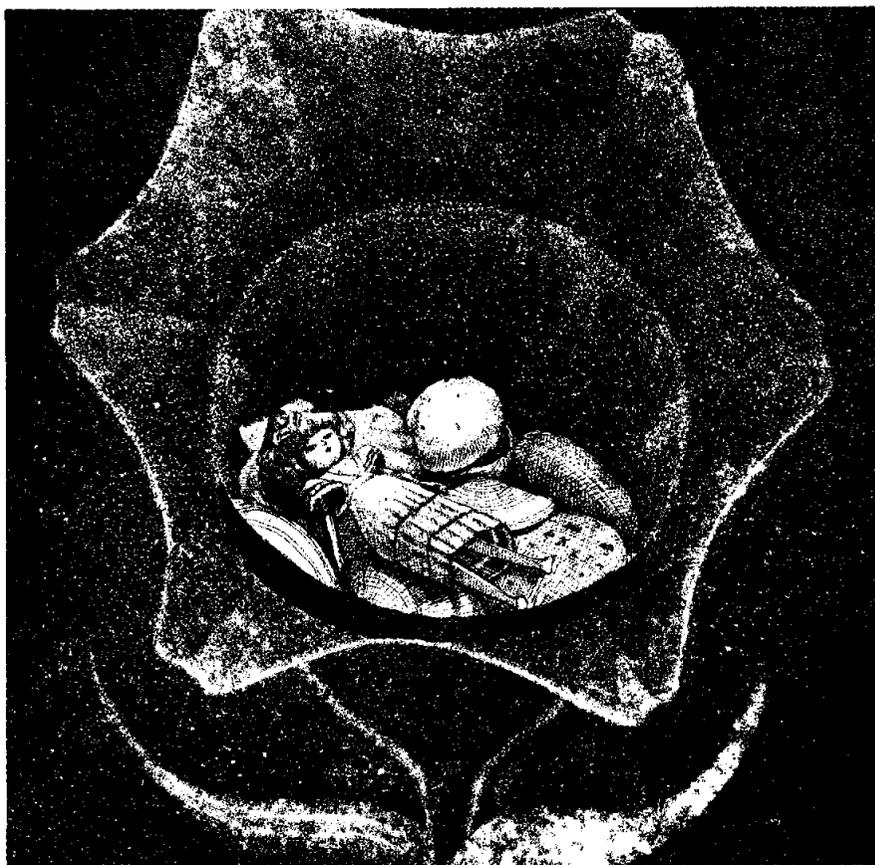
これらの非難には当っているものもあり、当たっていないものもある。そして私には、かれら難民の苦情に心を砕いている行政機関のあわただしい対応ぶりが、卑屈なまでにいじらしく見えてきた。私は訊ねた。

「その人たちは、はじめから日本を希望してきたのですか？　かれらが行きたかった国はほかにあったんじゃないのですか？」

答えは果してノオであった。ベトナムの難民たちはほとんどすべてが、フランスかアメリカへの移住を望んでいたのだと言う。これで一切の理由がわかった。日本をいやがるのも無理はない。惚れた男があるのに、いやいや他の男と結婚させられた女が、しばらくはねちねちと亭主のアラを数え立て、やり切れなさに叫

び立てると同じ心理だ。そのうちにあきらめて、あるいは亭主のいいところが見えてきて、うまく調子を合わせたり、ひよっとすると仲のいい夫婦になってしまうこともあるのだ。日本だって、悪いところばかりではない筈だ。

お断りしておくが、私はもちろんベトナムの難民たちを非難しているのではな



「プチ・ドール」 岡本 早百合（版画家・札幌在住）

自然用語辞典

〔資源問題〕

世界の国々が工業化するのにもない地球の資源は急速に枯渇しつつある。環境問題の世界的研究グループ「ローマ・クラブ」は1970年のままで消費量が幾何級数的にふえて行った場合、資源の現存埋蔵量がもちこたえる年数を計算した。それによると1970年を出発点として石油は20年、銀は13年、アルミニウムは31年、鉄は93年、天然ガスは22年、最も埋蔵量の多い石炭でも11年だった。この計算だと銀は1983年になくなり、石油はあと5年でなくなることになる。

1973年の石油ショックにはじまる経済の低成長は資源の消費割合を1970年にくらべて低くし、枯渇期をわずかにあとにのぼしたが、それも時間の問題である。人類が貴重な資源を永く利用できるためには、資源消費型でない生産方法と商品の開発、資源の再利用、未利用資源の開発の三つが必要である。しかし現在の諸国、とくに資本主義諸国では各企業が無計画に利潤を追求する生産の無政府性を制御できないでいる。

北海道では二次産業の未発達が原因となって資源の再利用という点でも著しくおくれしており、たとえばガラスびんは回収されても新しいガラス製品に再生することなく地中に埋められ、またアルミかんは再利用すると鉱石からアルミを作るのにくらべ8分の1の費用しかかからないのに、これも加工工場がないため放置されたままである。

〔均衡状態の社会〕

ローマ・クラブは資源を消費せず、環境も破壊しない均衡状態の社会とは「人口と資本を増加させる力と減少させる力が注意深く制御されたバランスに達し安定的な状態にある」社会であるという。このような社会のはたらしを高めるには、△廃棄物の回収、汚染の防除、不用物を再利用するための新しい方法△資源の再循環技術△製品の寿命を長くする設計△太陽エネルギーの利用△害虫を自然的方法で駆除する方法△減少する死亡率に出生率を等しくすることをたすける避妊法の進歩などが必要である。

このような社会では商品の増産に主力はおかれないため人人の労働時間はへり、自由時間がふえるだろう。その自由時間は現在のような資源消費的、汚染的活動ではなく、本来の人間にふさわしい文化・芸術の享受、科学研究、運動競技、社会的活動に向けられる。統治機構は縮小され、市民が自発的に自分たちを統治することもできるようになる。このような「浪費のない社会」の構想は、またマルクスが構想した「自由の国」によく似ている。しかし問題はそこにいたる方法と、それを支える国民の発達度であろう。

(文責一紺谷 友明)

い。これと同じ心理が、われわれ日本人にも、いや世界中の人々——先進国と言われる国の人々にもある、と言いたいのである。

国際ロータリーに青少年交換という事業がある。すでに長い歴史をもち、十五才から十九才までの高校生が、一年間だけで六〇〇人以上、他国の高校で勉強している。休暇などを利用して短期交換もあるが、多くは一年間の留学である。私が所属している北海道南半分地区(第二一地区)では現在、アメリカ、カナダ、オーストラリアから計十二名の高校生を受入れ、それと同数の北海道の高校生が交換であちらで勉強している。学費や滞在費は地元ロータリーが負担し、かれらは一年間、二、三の家庭に受け入れられ、家族の一員として生活する。学友たちや地元の青年たち、ロータリアンたちとの交友を通じて、底辺からその国の生活と民情、文化について学ぶ。まこと

に実り多いプロジェクトである。

ところが世の中には完全ということはいえないように、ここにも問題がないわけではない。出身国という見地からみると、アメリカからの交換学生にはとかく問題のケースが多い。なかなか日本の生活様式になじまない。とりきめた時間までに家に帰らない。夜おそくまで異性と遊んでいたりする者もある。日本の悪口を言う。注意すると反抗する。あるいは重いホームシックにかかり、とうとう途中で帰国させたケースもある。これに反し、オーストラリアからの奨学生はほぼ模範的な生活態度だ。

このちがいはどこから来るのか？ アメリカからの高校生には交換先に日本を第一志望とする者はほとんどいない。ヨーロッパの先進国を志望したが、満配で心ならずも日本へ来た、というわけだ。これに反し、オーストラリアからの高校生はすべて日本を第一志望国としている。

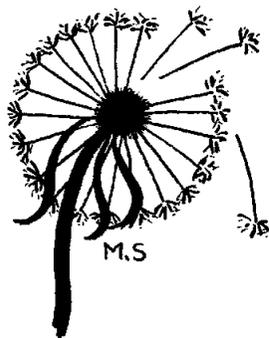
ここに理由があるわけだが、アメリカからの学生も帰国する頃には大の親日家になるのだから、来日当初のショック状態に、こちらは過大にあわてふためくこともないというわけだ。

ところで、これら一連の外国人の態度をわれわれは果して非難できるだろうか？ だいたい日本のロータリーが学生や研究グループ交換の相手国に、例えば東南アジアの発展途上国を選んだことがあるだろうか？ あるいは国家間の協力事業として、例えばサウジアラビアに病院を「寄贈」する場合には、建設までは日本がやっても、肝腎の医者は一向に行きながらない。日本人の目は、まだ先進国からの撰取にのみ向けられ、発展途上国への分配という考えは育っていない。

最近、日本の産業のソフト化、サービス化が進み、貿易面でも物とともに人が動く動向が目立ってきた。経済交流が文化交流と一体化する新時代を迎えたわけ

で、経済人のみならず日本人全体が意識変革を求められている。学生は学生なりに発展途上国には留学したくない学制上の理由もあるから、国内で解決すべきことはさっさと片づけて、時代に遅れないようにしたいものである。

(札幌医科大学名誉教授・札幌市在住)



北海道の自然を描いて80年…!

繁野 三郎(道展名誉会員)

インタビューア：八木 健三(自然保護協会々長)



北海道画壇の最長老、繁野三郎さんは明治二十七年(一八九四)年十二月三日生れ。九〇才を越えたいまも、毎日円山のお宅で画業に余念がない。春近い明るく陽ざしのさしこむ画室で、画のこと、自然のことなどがかった。

Q □この度の協会主催「北の自然を描写展」には先生にいろいろご指導ご協力を賜りまして、まことにありがとうございました。お蔭様でたいへん盛況でした。繁野 ■あの展覧会はなかなか多彩な会でしたね。私も自分の画が売れてないと恥しいと思つて見にいったら赤札でネ、安心しましたよ(大笑)。(一実は開会と同時に売却済でした。記念展もいろいろな方の画を集めたし、歩々の会展もかざらないたのしさがよかつた。チャリテイ展もあなたの方の画ものびのびしてよかつたですよ。全体に大成功でした……。

Q □おほめいただき恐れ入ります。ところで先生が画家になられたときのことなど……。

繁野 ■実は大正五年二二の時だった、上野美術学校の入学試験を受けたが、色弱ということではわられた。すつかり世の中が暗くなってネ……。ところがその後石井柏亭さんが北海道にスケッチに来られた。それ迄に描いていた沢山の画をかえて、当時は札幌駅前にあつた山形屋旅館にお訪ねして、ご指導をお願いした。先生は丹念に見て下さつた上、「これだけ描けるんだから、美校に入つて悪い影響なんか受ける必要はない。北海道の自然を師として勉強し給え」とおっしゃつた。その言葉がいまも耳に残つている、自分の気持にピッタリだからネ。「光や空気も物質も思つて描け」といわれた教えに従つて北海道の自然を描くようになった。

Q □油画の方はお描きになりませんか？

繁野 ■若いときは油も描いて、石井さんの一水会展などに出したこともあるが、昭和五年日本水彩画会々員になつて以来、

唯一人の会員だつたので、北海道水彩界の指導という点もあり、水彩一本に絞つています。

昭和一二年には、当時道新の美術記者だつた沢枝重雄さんが北二西二に初めて本格的な画室をつくられ、私も毎日のように夜通つては裸婦のデッサンなんかやつたものだ。それから一四年一〇月には北海道の美術家が大団結して、北海道美術展(道展)が結成された。その話をきいて胸がワクワクしたのを覚えています。

Q □先生は道の北海道文化賞(昭三五)や市の札幌市民芸術賞(昭五四)も受賞されました。

繁野 ■道の文化賞は実は美術教育に對して下さつたんです。昔は画の教育というとお手本を見て、それを忠実に模写する「臨画」だった。それではいけないといつたので、自由な美術教育をやつたかめなうが、なかなかその方法がつかめなう。そこで私は昭和五年「想画」写生「図案」の三本柱をつくり、道内の各レベルの学校を巡つてその教育法を説いて、児童や生徒が自由に画を描くようにした。その三十年間の努力に對して賞をいただいたわけです。礼文、利尻から根室、全部廻つたものです。とうとう青森まで引つぱり出された。

Q □松山額縁店でうかがつたのですが、セーブル水彩筆の最多愛用者として、ニエートンから表彰されたとか……。

繁野 ■ハハ……。そんなこともありましたが、あの筆は何といつても最高ですね。なにしる硬い紙にゴシゴシ描くので、すぐすり切れちゃうわけですよ。(笑)。

Q □ところで一世紀近く見てこられた札幌の自然の変化はどうでしょうか。

繁野 ■この円山の家は昭和九年から、その前は子供のころから南五西六、いまのススキノのど真中だつた。まわり一面リンゴ林で、屯田の友達の家にくくときは、東本願寺の墓地の傍を通つたが、ニレがうっそうとして子供心に怖かつたも

んですよ。人玉がでるとか……。この円山も初めのころは四方の窓から画を描いたものだったが、この頃はすつかり建物ができて、三角山しか見えなくて淋しいネ。

Q □先生の自然観をおきかせ下さいませんか。

繁野 ■わたし達は自然があつて初めて画がかけれる、自然を守る気持で一杯ですね。ところがその自然がだんだん傷つけられてくる……。

北海道神宮なんかも風致地区の看板は立つていけるのに、切角の木を切つたり、建物を新しく建てたり……。伊勢神宮などのように自然をもつと大切にすればいいのに。それで五十年の慣習を破つて、この元且詣ではやめましたよ(笑)。

市の方も無闇と木を切りますね。円山公園のこのコブシの木やシラカバも公園整備といふことで切られ、画を描く意欲を失わされましたよ。(傍らの画の中の木々をさし示しながら悲しげな表情)。

Q □先生のご意向を市の方にも伝えてお願ひしましょう。

繁野 ■昔大通九丁目「鯨森」というのがあつて、遠くから見ると、鯨のように見えたものだったが、どうなったのかね。どうも大通公園も人工の花壇ばかりが目立つようだが、もう少しうっそうとした樹を植えたらどうかナ。自然の林のジャンクにして、その下はコンクリートではなくて、自然の小径をつくつたら。一一丁目あたりから旧控訴院あたりにかけて……。落葉なんかそのままにして、子供たちが駆けたり、虫を探つたりできるようにしたらいいネ……。

Q □どうもたのしい夢のあるお話、長い間ありがとうございます。

あとがきめがねも補聴器もなく、実ははつきりしたお話し。ユーモアも交えてたのしい一時間。これで私もまだ二〇年は活動できるナ……。と、力づけられたインタビューでした。



協会の活動

○昭和五十九年十一月二十二日(木)
五十九年度第七回常務理事会
主な議題

- 一、情報公開の制度化の件
- 二、監査報告の件

○十二月十四日(土)

精進川河川改修地現地調査
調査 八木会長、新妻副会長、戸蒔氏

○十二月二十四日(月)

第八回常務理事会
主な議題

- 一、全国一斉ブナ林観察会共催の件
- 二、千歳川放水路計画の件
- 三、支笏湖美苗地区の取り扱いの件

○昭和六十年一月十五日(火)

全国書初め展表彰式

主催 北海道書道協会、当協会

場所 札幌市民会館大ホール

出席 八木会長

○一月二十二日(火)

北海道管区行政監察局研修講話

主催 行政監察局

場所 同所

講師 八木会長

○一月二十三日(水)

全国野鳥保護のつどい北海道実行委員会
設立総会

場所 道庁赤レンガ庁舎

出席 八木会長

主な議事

- 一、実行委員会会則の承認
- 二、副会長、監事の指名(八木会長は、副会長に指名される)
- 三、野鳥保護のつどい開催実施計画の承認

○二月四日(月)

第九回常務理事会
主な議題

- 一、横津岳スキー場の件
- 二、減価償却積立預金の取崩の件
- 三、諸規定の改正の件
- 四、論文コンテストの件

○二月十四日(木) 十九日(火)

「北の自然を描写」展

主催 当協会

共催 歩々の会

後援 環境庁、北海道

会場 札幌丸井今井デパート八階

入場 一九〇〇名

○二月十六日(土)

第九十四回理事会
主な議題

一、新入会員承認の件

二、監査報告の件

三、横津岳スキー場の件

四、減価償却積立預金の取崩の件

五、諸規定の改正の件

○二月十七日(日)

講演会
主催 当協会、北海道自然保護協会、
函館植物研究会

会場 函館ホテルアカシヤ

講師 加藤多一氏、辻井達一氏

参加者 一五〇名

自然保護シンポジウム その保全と利用

串崎 英子
(国際ソロプチミスト釧路会長・釧路市在住)

私共国際ソロプチミスト釧路会員が、日頃奉仕で得ましたさやかな益金を、釧路自然保護協会の基金として寄贈させていただきました。ここで、この様な、学術的かつ熱気の溢れるしかも正面から、自然保全と利用という、大変大きなテーマに、良心的に取りくんだ、シンポジウムに、出席させて頂きまして誠に光栄でございます。

私も釧路湿原を背に負って生きている市民ですから、釧路湿原に限って申し上げますと湿原を愛するというか、湿原は、神様がながい時間をかけて私達につくって下さった、自然のミュージアムであると、誇りに思っております。豊富な資料でわかり易く、科学的な講演の後に、感性で捕えた話で申し訳しございませんが、現在、湿原の中に道が出来たり、排水溝をつくり、これを宅地化することもまた開発であるという考え方が存在するのでも現状の様です。

湿原のはしに、ガラスや砂が注ぎ込まれるのを見ますと、いつかこれが全体に及ぶのではないかと、自分の体の中に砂やガラスが、注ぎ込まれる様な気がします。

ところで私は、飛行機の操縦をします。訓練空域が湿原の上でしたので、春夏秋冬、湿原が、実に様々な表情をもっている事を知っています。由返りをすれば、湿原は私の頭の上、クロバリーフや、8字飛行をすると正面に、また横に、湿原はいつも私の飛行技術を見守っていてくれた暖かい存在であった事を、命がけで感じていました。

空から見ますと釧路川がゆるやかに、キラキラ輝いて、とても美しいのですが、よく見ますと、一面の草の中を、昔の川の跡が、はっきりと蛇行しているのがわかります。旧釧路川、旧々、旧々々という様に、何時ごろか

ら、今の川になったのかわかりませんが、多分、流れが緩やかになったのでしよう。私の湿原への愛着は、ある時期、湿原と苦楽を共にしたといえますか、湿原の手ざわりを肌で感じたからに他なりません。

話は変わりますが、先月、ヨーロッパ、スイスのモンブランに登りました。頂上、三八四二米からイタリヤ側に、大空中ケーブルがあります。途中、岩のビークのトンネルをくぐるだけで、後は気の遠くなる様な、長いケーブルが、真白に輝く氷河の中に消えています。これが、景観を損う支柱は一つもありません。

これに乗りまして、大氷河、クレパスを見下す時の恐怖にも似た感動は、忘れられませんが、モンブランとの接点で初めて誰れでも美しさにふれる事が出来る訳です。

自然を保護し、かつ正しく利用し、愛する為には、私達人間がどこに接点をつつけるか、たとえば湿原を見下す、ガラス張りの、支柱のない、ゴンドラがあれば、私の飛行機で感じた様な感動を、皆様に感じて頂けるのではないかと、夢は果しなくひろがります。湿原を死蔵する事なく、足をふみこんだ、手ざわりの自然を肌で感じる為には、何処かに、実際の接点をつつける事、それが先程来このシンポジウムのメインテーマの泥炭の利用かもしれないし、牛の飼育かもしれない、また私の夢みる観光かもしれない。人間達との実際の接点をつつけながら、その美しさを護り、その生態系を正しく保護することが湿原の保全と利用の基本であらねばならないと考えます。共存共栄、車の両輪の如く、自然の保全と利用への関心が、今后ますますたかまって行きます様、関係機関の方々の御配慮を宜しく御願います。

記念論文募集

——二十一世紀への提言——
「北海道の自然をどのように守り育てるか」

二十一年紀まであと十六年になりまし
た。北海道自然保護協会では、ことしの
創立二十周年を記念し朝日新聞北海道支
社と共催、道、道教委後援で「これまで
豊かだった北海道の自然をどのように有
効に利用しつつ保全してゆくか」をテー
マに一般市民および小・中学生から卒直
な意見や提案をもとめ、それを表彰し公
表して自然保全に寄与することにしまし
た。本協会の会員および子供さんたちの
皆様もふるって応募くださるようお願い
いたします。

賞
▼一般の部(二十一世紀への提言)―北
海道の自然をどのように守り育てるか―
をテーマとする)

入選一名 賞状および賞金十万円
佳作三名 賞状および賞金五万円
▼小学生および中学生の部(私たちと自
然)をテーマとする)
各入選一名 賞状および楮
各佳作三名 賞状および楮

募集要領
(一)一般の部は四百字詰原稿用紙三
十枚以内、小・中学生の部は四百字詰原
稿用紙五枚以内。

(2)新聞、雑誌等に発表されたもの
は応募できません。

(3)応募原稿の表紙に論文の題名と、
左記の事項を明記してください。

氏名・年令・性別・自宅住所(郵便番
号および電話番号)小・中学生の場合は、
このほかに学校名・学年。

(4)応募原稿の掲載ならびに出版権
は主催者に属します。原稿はお返しいた
しませんので、必要があればコピーをと
っておいてください。

審査員

八木健三(当協会会長、新妻博(当協
会副会長、鮫島惇一郎(国立林業試験場
研究室長、紺谷友昭(当協合理事)、中島
清成(朝日新聞北海道支社編集総務)。

送り先

〒060札幌市中央区北一条西七丁目 広
井ビル五階 北海道自然保護協会(封筒
に「論文」と朱書して下さい)電話〇一
一―二五―一五四六五

締め切り

昭和六十年五月三十一日(必着)

入賞発表

六月中旬の朝日新聞道内版および当協
会の会報。

作品発表

六月〜七月の朝日新聞道内版および当
協会の会誌「北海道の自然」に入賞作品、
佳作の全文または要約を掲載。

行事のご案内

第三十九回愛鳥週間

全国野鳥保護のつどい(前日祭)
テーマ 育てよう 人と野鳥のふれあう
心

主催 全国野鳥保護のつどい北海道実行
委員会
日時 五月十一日(土)午後二時〜六時
三十分

会場 札幌市民会館
入場料 一般 二、〇〇〇円
高校生以下 一、〇〇〇円

プログラム
・映画「タンチョウの詩」
・講演「野鳥と私」加藤幸子氏(芥川賞
作家)

・常陸宮御夫妻ご臨席
・横路知事あいさつ
・コンサート札幌 指揮 大町陽一郎
独唱 斉藤昌子

曲目 「鳥の詩」詩・阿久 悠 曲・
坂田晃一
組曲「鳥」レスピーギ作曲ほか

当協会入会方法!!

年会費個人会員A三、〇〇〇円(個人B)
二、〇〇〇円(同一世帯でたとえば夫婦・親
子・兄弟など二名以上の場合二人目から)
学生会員二、〇〇〇円、団体会員一、〇
〇〇円(二口)
会費納入北海道拓殖銀行本店〇一七―五九
北海道銀行本店〇一四四四、郵便振替口座・
小樽一―四〇五五

○問い合わせ・申し込みは同実行委員会事
務局へ(札幌市中央区北二条西七丁目道
庁第二別館・電話〇一―二二―一七六
三八)

寄贈図書

○「論点・第三号」N・S・プロダクシ
ョン社寄贈・佐々木栄松
○「美術家とふるさと」(田中日佐夫監)
産業報知センター寄贈・佐々木栄松
○「パルプ工場は知っていた―石狩川・
水銀づけの恐怖―」(壇上 滋著) 亜
紀書房寄贈・寺島一男
○「よみがえれ石狩川―パルプ工場の水
銀汚染―」公開自主講座実行委員会
寄贈・寺島一男
○「スタブカムシベ」大雪と石狩の自然
を守る会寄贈・寺島一男
○「復刻・北海道主要樹木図譜」(宮部
金吾ほか著)北大図書刊行会寄贈・
八木健三

昭和六十年三月二十五日発行
〇六〇 札幌市中央区北一条西七丁目
広井ビル五階

発行所 社団法人北海道自然保護協会
電話(〇一一)二六―一六五六代
(〇一一)二五―一五四五直

郵便振替口座小樽 一―四〇五五
北海道拓殖銀行本店 〇一七―五九
北海道銀行本店 〇一四四四

発行人 八 木 健 三
印刷 特急印刷株式会社